



Title	<紹介>蜂矢真郷著『国語語構成要素研究』
Author(s)	伊藤, 智弘
Citation	語文. 2024, 122, p. 95–96
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/98214">https://doi.org/10.18910/98214</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

蜂矢真郷著『国語語構成要素研究』

伊藤智弘

『国語語構成要素研究』（以下、「本書」）が扱うのは、上代・平安時代を中心とした、日本語古代語における語構成である。

日本語の本格的な語構成研究は、阪倉篤義『語構成の研究』を嚆矢とする。その後の研究は蜂矢氏によって推し進められ、「国語重複語の語構成論的研究」『国語派生語の語構成論的研究』『古代語形容詞の研究』などが到達点を示している（なお、ここに上げた三書は、本書において言及されることもかなり多いため、常に参観できるようにしたい）。

本書（及び、前掲著書）の検討は、『語構成の研究』に基づいた、語構成要素の独立性による分類を軸として進行する。すなわち、名詞・動詞の露出形といった「独立的要素」、接頭辞・接尾辞と

いっただ「非独立的要素」、そして「独立的要素」に準ずる単位としての、動詞・名詞の被覆形や形容詞語幹・語基など「準独立的要素」の分類である。本書は「準独立的要素」を検討の中心に据え、それが独立的・非独立的なものとの間にどのようなものとしてあるのか、を重要な論点とする（「準独立的要素」が含む範囲は、第四でもさらにお論じられる）。

第一篇「形容詞語幹・語基の用法」では、形容詞語幹・語基の語構成上の振る舞いや用法が、ク活用形容詞とシク活用形容詞の

異なりを踏まえながら、網羅的に整理される。同趣のものは「時別国語大辞典上代篇」などにあるが、それらを踏まえた上で、より広範・精密な記述である。以降の篇は、本篇での検討を基礎として展開される。

なおここでは、いわゆる学校文法とは異なる活用の捉え方がされている。形容詞終止形末尾のシを除いた部分を語基としたとき、語幹と語基が一致するク活用形容詞に対し、シク活用は「語基+シ」が語幹となり（サカナシ「賢」など）、語基と語幹が一致しない（以上のこととは『古代語形容詞の研究』に詳しい）。またこのことによって、シク活用形容詞において、語幹と語基との用法の異なりが指摘されることになる。例えば、同じように名詞が下接して複合語を構成する場合でも、語基+名詞（マサメ「正目」、ムナコト「空言」など）では「状態的意味を表す傾向」が、語幹+名詞（ハシヅマ「愛妻」、クシミタマ「奇魂」など）では「情意的意味を表す傾向」の存することが指摘される。

第二篇「被覆形と形容詞語基」では、名詞・動詞被覆形と、形容詞語基との関係（類似性）を検討する。ここで重要な類似性として挙げられるのは、いずれも（基本的には）準独立的要素として、複合・派生に用いられることがある。すなわち、名詞被覆形もク活用形容詞語基も、名詞を伴つて複合名詞を形成すること（サカヅキ「酒杯」、ナガコヒ「長恋」など）、動詞被覆形もシク活用形容詞語基も、動詞化接辞を伴つて派生動詞を構成すること（オコス「起」、タダス「正」など）である。名詞被覆形と動詞被

覆形の類似性については、既に有坂秀世・川端善明両氏にも議論がある。本篇は、これらの先行論を承け、発展させたものと言える。

第三篇「形容詞語幹・語基と形容動詞語幹」では、形容詞語幹・語基と形容動詞語幹との関係が整理される。ここで対象となる「関係」は、「形容動詞後項が形容詞語幹（・語基）を持つ」（準独立的要素+形容詞語幹+ニ・ナリの例として、マナホニ「真直」など）、「形容詞と形容動詞で語幹・語基が共通する」（独立的因素+形容詞語幹の例として、シタドシ—シタドニ「舌疾」）、「形容詞語幹と形容動詞語幹の相互の派生」（形容詞の形容動詞化）に、さらに「形容詞化」が重なる例として、アカシ→アカラカ→アカラケシ）である。

第四編「準独立的要素と情態的語基」では、「準独立的要素」について、更なる検討が行われる。その際、「二つ以上の要素の複合・派生により構成されたもので準独立的であると見られる語基」（情態的語基）を中心的な検討対象とする。

注意したいのは、情態的語基は、「準独立的要素」には含めないということである（例えは、トホナガニ「遠長」の語基トホナガニは、ク活用形容詞の語幹、すなわち、単独の準独立的要素であるトホ「遠」・ナガ「長」の複合したものが、準独立的要素とは見えない。派生に関しても同様で、サヤカニ「清」の語基サヤカは、準独立的要素である語基サヤ「清」に非独立的要素である接尾辞力が伴つたものであり、準独立的要素とは見ない）。このような区別

は先行論にも似たものがあるが、本書は、語構成の観点からより詳細な整理を施したものである。

第五篇「派生情態的語基の用法と変遷」では、「今後とも発展する見込みのある課題」（「あとがき」より）として、第四章でも扱った情態的語基のうち、派生によつて構成されたものについて整理している。

まず、二音節語基が接尾辞ラ・ル・ロを伴う「ラ接尾形」（ヒロラニ「広」のヒロラなど）、同じくリ・レを伴う「リ接尾形」（ハダレニ「薄垂」のハダレなど）について、それぞれの用法の変遷を述べる。続けて、二音節語基と（ク活用）形容詞語幹の関係が整理される。ここには、二音節語基が形容詞語幹かそうでないかで違いが見られる。例えは、語基が形容詞語幹でない場合には多くの例がある「語基+口」（スゾロニ「漫」のスゾロなど）の形は、形容詞語幹の場合には見られない（ありえそな場合でも、ホソラカ「細」のホソラのような「語基+ラ」しか見えない）、などといつた違いである。

先行論への広い目配りと、用例の博搜に基づく精緻な記述・考証は、氏の研究の特色としてこれまでも言及されてきたところであり、本書もそのスタイルで貫かれている。極めて堅実な研究手法の実践であり、論の内容以外にも、学ぶことの多い一冊である。（培文房、二〇二三年、四一八頁、一四〇〇〇円+税）